

2020年3月15日

東京聖三教会

出エジプト 17:1-7

ローマ書 5:1-11

ヨハネ 4:5-26、38-42

主よ、渇くことがないように、
その水をください



*Whoever drinks the water
I give him will never
be thirsty*

日本聖公会東京教区

東京聖三一教会

2020年3月15日
東京聖三教会

出エジプト 17:1-7
ローマ書 5:1-11
ヨハネ 4:5-26、38-42

主よ、渴くことがないように、その水をください

信仰者たちは悔い改めを通して、自分が神様のみ旨と異なる道を歩んではないか、信仰者としての道を外れた人生を歩んでいるのではないかなど省察します。信仰者は悔い改めを通して神様に、より近付き、成熟し、幸せに生きることができると信じています。それゆえ、私たちは大齋節を迎え、悔い改めて行こうと誓いました。

私は今日皆様に、悔い改めのための方法として一つのことをお勧めさせていただきたいと思います。それは「立ち止まる」ということです。この「立ち止まる」ということは、それまで進めてきた考えと行動を一旦中止するということです。もちろんほんのしばらくの間です。私が「立ち止まること」をお勧めするのは、悔い改めるためには、まず今までやってきたことから手を休めなければならないと思うからです。ましてや、私たちが経験しているコロナウイルスの状況にあっては、立ち止まって見るべきことが多々あります。コロナウイルスは感染症なので、信仰者の立場から見たら、信仰的な問題とは関係なさそうにも思われます。しかし信仰者は、神様のみ旨とは関係なく起こるように見える自然現象や偶然な出来事を通して神様のみ旨を考え、自分を省察する人です。

本当にコロナウイルスの状況は、私たちに多くのことについて「立ち止まりなさい」というメッセージを与えてくれています。けれども、今やっている仕事を中止してしまうと、経済活動だけでなく、ささやかな日常

生活にも多くの困難と支障をきたしてしまいます。それで、ある方はこのようなコロナウイルスの状況に教会が過度に敏感に騒ぎすぎているのではないかと思うかもしれません。しかしコロナウイルスは、人々が活発に動けば動くほど、人々の接触が多ければ多いほど、終息しにくいのです。ですから、私たちはどこでどのように立ち止まるべきかを考える必要があります。

ところで、一方で考えてみると、私たちは普段の日常生活ではほとんど「立ち止まること」をせずに、あまりにも忙しすぎて、それゆえ多くのことを見逃しているのかもしれません。例を挙げてみましょう。電車の中で暇な時間を節約しようとスマホを見ている人が多いです。しかし、皆がスマホばかり見ていると、思いやるべき人が見えなくなります。他人と話をする時、絶えず自分のことばかり話す人もいます。しかし、自分の話を止めないと、相手の話は聞こえなくなります。道を歩きながら、立ち止まれば道端に咲いた花が新たに見え、隣人の顔の表情にも気づきます。人生には、立ち止まってこそ初めて見えるものがあります。「立ち止まること」を通して今日の困難な状況を解決するための、新たな人とのつながりも見出すことができるでしょう。少時的外れのお話かも知れませんが、ある信仰者は「司祭はすることが何もない」と指摘したりもします。もっと忙しく働けということでしょう。しかし忙しくしてはいけません。考えてみてください。司祭が忙しければ、司祭と話をしたくてもあきらめてしまう人もいるのではないのでしょうか。

今日私が皆さんにお勧めする「立ち止まる」ということは何より信仰的な意味としての「立ち止まり」です。それは、慌ただしい生き方の中では、聖書のみ言葉を味わって自分のものにすることが容易ではないからです。しばらく続けてきた仕事から、手を休めて、聖書のみ言葉を振り返り味わう時、聖書のみ言葉は魂の糧となり、命の水になります。

これから今日ご一緒に読んだ福音書を見てみましょう。福音書には最初の場面から「立ち止まること」が表現されています。イエス様は長い旅に疲れて、サマリアのシカルという町のある井戸のそばでしばらく

休んでおられました。そしてある女性に出会いました。サマリアは昼 12 時ごろにはとても暑くて、誰も動きませんでした。けれども、このサマリアの女は水を汲むために井戸に来ました。人々の目を避けたのかも知れません。

このサマリアの女には夫が五人もいました。今連れ添っているのも夫ではありません。ある方は、このサマリアの女の品行がよくないとおっしゃるかもしれません。しかしそのようにだけ考えることもできません。当時の女性は夫や息子、親戚がいなければ経済的に大変な生活を余儀なくされました。たぶんこのサマリアの女もそのような苦境の中にいたのかもしれない。このサマリアの女は生き残るため男性に頼りながら生きていくしかなかったでしょうし、何度も見捨てられる苦しい立場にあったのかもしれない。けれども、村の人々はそのようなサマリアの女の境遇を理解できません。非難とイジメの対象だったのかもしれない。それで、このサマリアの女も、町の人たちの冷ややかな目を避けようと、暑すぎて誰も井戸に水を汲みにこようとは思わない、人々にとっての「立ち止まりの時間」に井戸に来たのです。

ところで、このサマリアの女は喉が渇いて水を汲みに来たのですが、実際もっと渇いていたのは魂でした。そのサマリアの女はイエス様との話を通してそれに気づきました。イエス様はこのようにおっしゃいました。

「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」(4:13-14)

するとサマリアの女は、自分の人生に何が必要なのかを悟って、このように求めました。

「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」(4:15)

このサマリアの女も「立ち止まること」がなかったら、自分の魂の渇きを知らないまま生きていたかもしれません。「立ち止まること」がなかつ

たら、自分の状況が苦しいということだけ考え、他の人たちへの不満を胸に抱いたまま生きてきたかもしれません。聖書を注意深くお読みください。彼女は周りの話を自分のもののように考え、それが正しいと思って生きてきました。男性と女性の葛藤、サマリアとユダの信仰的な葛藤だけ考え、自分の町の井戸だけ誇りのように思っていました。イエス様との対話にその鋭い対立が見えます。しかし、彼女は自分の考えからいったん「立ち止まり」、イエス様のみ言葉に耳を傾けました。そしてついに救いの道を知ることになりました。立ち止まれば救いの道も開かれます。

私たちは今日ご一緒に読んで出エジプト記を通して「立ち止まる」ことについて学ぶことができます。この出来事は、イスラエルの民が荒れ野での生活を始めた時に起こりました。イスラエルの民は飲み水がないと言って、モーセに向かって不平を述べました。すると神様はモーセに「ホレブの岩を打て、そこから水が出る」とおっしゃいました。このストーリーは伝説のように理解されます。しかしこれは、立ち止まり、自分の内面の声に耳を傾けなさいというメッセージでもあります。エジプトから脱出する時、神様はイスラエルの民をいつまでも守ってくださるとおっしゃいました。けれども、イスラエルの民はそれを信じられませんでした。もしかしたらそれをしばらく忘れていたかもしれません。それゆえイスラエルの民は、物質的な水だけに執着していました。喉の渇きは水を飲めば解決します。もっと重要なのは魂の渇きです。欲求に執着し続けてきた道で、一旦立ち止まり、自分の内面を見ると、胸の中から神様から預かった命の水が湧き上がります。もしかたら、モーセが岩を打ったのは、イスラエルの民に、自分の胸を叩きながら悔い改めなさいという象徴的な行動であるかもしれません。

世の中の人々は「立ち止まってはいけない」と言います。忙しく働かなければいけないとも言います。激しい競争の社会で立ち止まると落伍者になり負け犬になると言います。しかし、信仰者の人生にとって落伍とか敗北はありません。神様が私たちをこの世に遣わされたのは競

争ではなく協力のためです。競争ではなく協力だけが人々を幸せに導きます。協力は、しばらく立ち止まって、お互いを見つめる時こそできるものです。

今日のローマ書を通して使徒パウロはこのように述べました。

「わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。」(ローマ 5:3-4)

このみ言葉は私たちが試練を乗り越えることができる力と勇気を与えてくれるみ言葉でしょう。私たちが直面している厳しい現実の中にも、しばらくやっていたことから手を休め、このみ言葉を振り返って味わってみましょう。そして今日の福音書に出てくるサマリアの女のように「主よ、渇くことがないように、その水を私にもください」と祈りましょう。そうすれば、神様は私たちに魂の渇きを癒してくださる命の水だけでなく、この厳しい状況を乗り越える知恵と勇気をも与えてくださるでしょう。

一日も早くコロナウイルスが終息し、皆が日常生活に戻っていきますようにと祈りながら、この一週皆さんと皆さんの家庭に神様のみ言葉を通して現れる豊かな恵みがありますように心からお祈りいたします。